

「泣く音にまがふ浦波」について

藤河家 利 昭

はじめに

源氏が須磨において初めて秋を迎える場面は、「是より書いてたるすまの浦のあはれおもひやるべし」(『岷江入楚』^{注1})とあるように、古来情趣深い場面としてよく知られている。しかし、その中の源氏の歌は解釈が一定していないようである。従来の説を検討した上で新たな観点から解釈を試みるとともに、この歌の物語における意義についても考えてみたい。

一、「恋ひわびて」の歌の解釈

源氏の歌が詠まれる場面を引用する。

須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、閑吹き越ゆると言ひけん浦波、夜々はげにいと近く聞こえて、またなくあはれなるも

のはかかる所の秋なりけり。

御前にいと人少なにて、うち休みわたれるに、独り目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに、波ただこもとに立ちくる心地して、涙落つともおほえぬに枕浮くばかりになりけり。琴をすこし掻き鳴らしたまへるが、我ながらいとすごう聞こゆれば、弾きさしたまひて、

恋ひわびて泣く音にまがふ浦波は思ふかたより風

や吹くらん

とうたひたまへるに人々おどろきて、めでたうおぼゆるに忍ばれで、あいなう起きあつつ、鼻を忍びやかにかみわたす。げにいかに思ふらむ、わが身ひとつにより、親兄弟、片時たち離れがたくほどにつけつつ思ふらむ家を別れて、かくまどひあへると思すに、いみじくて、いとかく思ひ沈むさまを心細しと思ふらむと思

せば、昼は何くれと戯れ言うちのたまひ紛らはし、つれづれなるままに、いろいろの紙を継ぎつつ手習をしたまひ、めづらしきさまなる唐の綾などにさまさまの絵どもを書きすさびたまへる、屏風の面どもなど、いとめでたく見どころあり。(注2) (二一九九、二〇〇)

源氏の「恋ひわびて」の歌は、「此歌ことに妙也云々余情を思へし」(『一葉抄』(注3))と言われるが、この解釈について現代の注釈等を見ると次のようになってい

恋しさに耐えかね泣く声かと聞える浦波の音は、わたしのことを思っている人たちのいる都の方から風が吹いてくるせいであろうか。「恋ひわびて泣く」主語は、源氏のことを「思ふ」都の人々。

(新編日本古学全集一九九頁)

この解では、「恋ひわびて泣く」のと「思ふ」のと、一貫してその主語は「都の人々」ということになる。

恋しさに堪え切れずに泣く泣き声のように、須磨の浦の波音が聞こえるのは、我が思う都の方から風が吹いてきて、都人の悲しみの声を運んでくるからであろうか、の意。

(新日本古典文学大系一・三二頁)

この解では、「思ふ」のは源氏であり、「恋ひわびて泣く」のは「都人」のように取っている。

都恋しさに耐えかねて泣く声かとも聞える浦波の音は、私の思う都の方から風が吹くからであろうか。都に残した女たちを思う自分の気持から、浦波が悲しく聞えるのであるうかの意。(新潮日本古典集成二・二三七)

この解では、「思ふ」のは源氏であり、「恋ひわびて泣く」のは結局、源氏ということになるのであろうか。

恋いわびてなく泣き声にも似る浦波の音、あれは、思いのぶほうから風が吹くからであろうか。

わが「思ふ方」都から吹く風のせい、わたしは泣くと、都で泣く人の声を風がこまではこんでくる、と、両解がある。(『源氏物語評釈』第三卷・九六、八頁)

この解では、「泣く音」に両解があるとした上で、後の文によれば、「思ふ」のと「恋ひわびて泣く」のは源氏と都の人の双方であるように取れる。

古註釈は次のようである。

『河海抄』は、壬生忠見の「浪立たば沖の玉藻も寄りぬべし思ふかたより風も吹かなん」(『思見集』(注6))を上げるが、この歌では「思ふかた」は作者の思う方角になる。

『細流抄』は、藤原定家の「袖に吹けさぞな旅寝の夢も見じ思ふかたよりかよふ浦風」(『新古今集』(注7)卷十・羈旅「拾遺愚草」旅三句「旅寝の夢は見じ」)の歌を上げ、「此歌

を思へるなるへし」とする。この歌では、「思ふかた」は作者が思っている古里の方角である。

箋聞書わかおもふかたから吹風に立波成へし わかなく
ねにまかふはと也
〔岷江入楚〕^(注9)

この解では、「おもふ」、「なく」の主語は、いずれも源氏になる。

閑思かたの風吹てなくねにうら波のこゑのまかふと也
〔萬水一露〕^(注10)

この解では、「思ふ」、「泣く」の主語は源氏であろうか。

初雁も思ふかたをやしたふらんなくねにまがふ秋の浦波
〔新統古今集〕卷五・秋下 三条入道前太政大臣

この歌は源氏の歌をふまえていると見られるが、「思ふかた」の「思ふ」の主語は、初雁であるとともに作者である。

「心づくしの秋風」によって、都人である源氏には、「閑吹き越ゆると言ひけん浦波」が夜毎に近く聞こえて、この須磨の秋を「またなくあはれなるもの」と思わせる。ここには「浦波」とあることから、「秋風の閑吹き越ゆるたびごとに声うち添ふる須磨の浦波」〔新古今集〕卷十七・雑中 壬生忠見の方が合うのではないかとする『花鳥余情』等の説に対して、『細流抄』は、「此段の心は彼行平の中納言の閑吹き越るといひけむ所の浦波と云心也まへに心づく

しの秋風にとかきてこ、にて浦波とかける余情たくひなくみえたり」と、「秋風」と「浦波」との関連を捉えている。^(注11) またこの場面が「聴覚的な景に焦点を当てた風景」であることとの関わりも指摘されている。^(注12)

夜一人で目を覚まし、枕をもたげて「四方の嵐」を聞いてみると、「波」がすぐ側まで打ち寄せて来るような感があり、知らぬ間に「枕浮くばかりに」涙を流している。即ち、「浦波、夜々はげにいと近く聞こえて」は「心づくしの秋風」によるように、「波ただこもにと立ちくる心地して」となるのは「四方の嵐」によるのである。それを受けて歌においても、「浦波」が「恋ひわびてなく音にまがふ」のを「風」によるものとしたと考えられる。また「波ただこもにと立ちくる心地して」は擬人的な表現と見ることができ、そのことは歌において、「思ふかた」が源氏にとつただけでなく、直接は「浦波」にとつての「思ふかた」であり、さらに「恋ひわびて泣く音にまがふ」と、「浦波」を有情のものとするに繋がっていくと考えられる。

このように見ると、「木の間より漏り来る月の影見れば心づくしの秋は来にけり」〔古今集〕卷四・秋上 よみ人しらすの歌をふまえて「心づくしの秋風」とし、「旅人はたもと涼しくなりにけり閑吹き越ゆる須磨の浦風」〔統古

今集「卷十・羈旅 中納言行平」の下句を、「関吹き越ゆると言ひけん浦波」とした意図が、この場面が基本的に「風」によって立つ須磨の「浦波」の、源氏に及ぼす心情を描くことにあると言える。また源氏の住まいが、「おはすべき所は、行平の中納言の藻塩たれつつわびける家居近きわたりなりけり。海づらはやや入りて、あはれにすごげなる山中なり」(二八七)と、山中にあるので、「浦波」が関を吹き越えるとしたのである。それは「四方の嵐」を聞いてみると、波がすぐ側まで立つて来るように感じられることとも関わっている。

須磨に旅立つ前に、源氏は須磨という所について、紫の上を同伴すべきかどうかを迷うところで、「さる心細からん海づらの、波風よりほかに立ちまじる人もなからんに」(二六二)と思つている。源氏にとつて須磨は波風の外には訪れる者もない寂しい場所という認識があつたものと思われ。ここはそれを实地に体験する場面ということになる。

歌の後に、源氏が供人たちのことを「親兄弟、片時たち離れがたくほどにつけつつ思ふらむ家を別れて、かくまどひあへる」と思つていて、その心持と源氏の歌とが軌を一にしていると見れば、「思ふかた」も源氏が都の人々のことを思つていることになる。また「いとかく思ひ沈むさまを

心細しと思ふらむと思せば」とあり、その供人が見た源氏の様子といえは、「恋ひわびて泣く」と歌つた源氏の心持と姿であり、「泣く」のは源氏ということになる。

ただ「恋ひわびて泣く音」というように源氏が声を上げて泣いたとは書かれていない。そのことから「泣く」のが都の人という解が出てくるのではなからうか。しかし、「枕浮くばかりに」とあるように、源氏は泣いて涙は流しているのである。また次の場面では、「雁の連ねて鳴く声楫の音にまがへるを」とあつて、これは「恋ひわびて泣く音にまがふ浦波」と対応していると考えられる。鳴く声と泣く声である。源氏の「初雁は恋しき人のつらなれや旅の空飛ぶ声の悲しき」(二〇一)の歌は、楫の音に紛う雁の鳴き声を「恋しき人」の泣き声と聞いているのであり、「恋ひわびて泣く音」を源氏の泣く声とすることと対照的な構成になっていると見ることが出来る。これからすれば、「恋ひわびて泣く音」を立てるのも都の人とは取り難いであろう。

さて、ここで「音」を立てているものは源氏の琴の音である。その「いとすごう聞こゆれば」というぞつとするほど物寂しい琴の音には、「四方の嵐」によつてすぐ側まで立つて来るような「波」の音を聞いて涙を流している源氏の心持が表われている。(注19)その源氏の心持を表わした琴の音

を、「恋ひわびて泣く音」と表現するということは考えられる。

「休聞抄」^(注14)には、「こひわひて 歌都の事を也思方より風吹て琴にかよふかと也」とある。このまま取れば「風」が「琴」の音に通うのであるが、或いは「風」による浦波が、「琴」の音に通うと取っているのかも知れない。^(注15)

この琴は京から携えてきたものであつた。

かの山里の御住み処の具は、え避らずとり使ひたまふべきものども、ことさらよそひもなくことそぎて、またさるべき書ども、文集など入りたる箱、さては琴一つぞ持たせたまふ。ところせき御調度、はなやかなる御よそひなどさらに具したまはず、あやしの山がつめきてもてなしたまふ。^(一七六)

これは白楽天の「草堂記」により、源氏の須磨への退去が白楽天の江州左遷に倣つたものと言われている。^(注16)源氏は、須磨・明石でこの琴を弾き、古里を離れた悲愁をその音色にのせることによつて、琴の弾き手としての本領を發揮するのである。

「泣く音」と琴の音との関連を示すものとして、明石の巻に、源氏が明石の君と別れる場面で、形見の琴を詠んだ二人の歌がある。

「琴はまた掻き合はするまでの形見に」とのたまふ。女、なほざりに頼めおくめる一ことをつきせぬ音にやかけてしのばん

言ふともなき口ずさびを恨みたまひて、

「逢ふまでのかたみに契る中の緒の調べはことに変らざらなむ

この音違はぬさきにならずあひ見む」と頼めたまふめり。されど、ただ別れむほどのわりなさを思ひむせたるもいとことわりなり。^(一七七)

明石の君の歌には、「一言」に「琴」を掛けるとともに、「音」に泣く音と琴の音を重ねている。

これを受ける形で、松風の巻に、源氏と明石の君が大堰の邸で再会した場面がある。

ありし夜のこと思し出でらるるをり過ぐさず、かの琴の御琴さし出でたり。そこはかとなくものあはれなるに、え忍びたまはで掻き鳴らしたまふ。まだ調べも変らず、ひき返しその折今の心地したまふ。

契りしに変らぬ琴の調べにて絶えぬ心のほどは知りきや

女、

変らじと契りしことを頼みにて松のひびきに音を

添へしかな

と聞こえかはしたるも似げなからぬこそは、身に余り
たるありさまなめれ。

(四一四)

明石の君の歌において、「音」は泣く音に琴の音を重ねてい
ると考えられる。ここでは「松のひびき」は、源氏の歌の
「琴の調べ」に対応するものであり、変わらないと約束し
た源氏の言（琴）を頼りにしながらも、実際には松風の音
に泣く音（琴の音）を添えていたという。形見の琴を弾い
て変わらぬ心を言う源氏の意とはずらしたところがある。

「松のひびき」は、松風の音に琴の音をこめるとする説
もあるが、「契りしこと」には「言」と「琴」とが掛けて
あり、「音をそへ」は、「松のひびき」に泣く音（琴の音）
を加える、と取るべきであろう。^(注17)ここは松風に琴の音を合
わせるのである。しかし、明石の君は源氏と別れた後の明
石での心細い暮らしを思い起こしているものであり、その点
では源氏も今似たような境遇にある。都の思う人々から離
れて恋しさに堪えかねて泣いているのである。また琴を弾
く住まいの様子についても、明石の巻に、明石の君の住む
岡辺の家が次のように描かれていた。源氏が通い始めた八
月十二三日の夜である。

造れるさま木深く、いたき所まさりて見どころある住

まひなり。海のつらはいかめしう、これは心細く住み
たるさま、ここにゐて思ひのこすことはあらじとすら
むと思しやらるるにもあはれなり。三昧堂近くて、
鐘の声松風に響きあひても悲しう、巖に生ひたる松
の根ざしも心ばへあるさまなり。(二五六)

ここでは松風に合わせて琴を弾くのであるが、心細く物思
いの限りを尽くすと思われる住まいは、須磨の秋における
源氏のそれとも似通うところがある。

後のもではあるが、次の藤原良経の歌は源氏の歌をふ
まえていると見られる。

恋ひわびて泣く音にかよふ琴の音も氷れる水のしたむ
せびつつ 『秋篠月清集』 寄琴恋

ここでは「泣く音」即ち自分の泣き声と琴の音が通うので
あり、さらにその「琴の音」を、氷の下を行く水が声をつ
まらせて泣いていることに喩えている。ここには伯牙が泰
山を思つて琴を弾けばそれを聞く鍾子期も泰山を思い、流
水を思つて弾けば流水を思うという「山水」の故事が踏ま
えられているのであろう。^(注18)

二、琴の音と「浦波」

次に、「泣く音」を源氏の泣く音であるとともに琴の音の

意であるとして、その琴の音と「浦波」との関係を考えてみたい。

須磨の巻の、八月十五夜と同じ頃、須磨の浦を船で通りかかった五節の君と源氏とが歌の贈答をする場面である。

浦づたひに遣遥しつつ来るに、外よりもおもしろきわたりなれば心とまるに、大将かくておはずと聞けば、あいなう、すいたる若き娘たちは、舟の中さへ恥づかしう心げさうせらる。まして五節の君は、綱手ひき過ぐるも口惜しきに、琴の声風につきて遥かに聞こゆるに、所のさま、人の御ほど、物の音の心細さと集め、心あるかぎりみな泣きにけり。(略)五節は、とかくして聞こえたり。

「琴の音にひきとめらるる綱手縄たゆたふ心君知る
らめや

すきずきしさも、人な咎めそ」と聞こえたり。ほほ笑みて見たまふ、いと恥づかしげなり。

「心ありてひきての綱のたゆたはばうち過ぎましや

須磨の浦波

いさりせむとは思はざりしはや」とあり。駅の長にくしとらする人もありけるを、まして落ちとまりぬべくなむおほえける。

(二〇三、五)

五節の君は、琴の聲が遥かに聞こえてきたので、土地の様子、源氏の身分、琴の音の心細さが一緒になって、心ある者たち全てと共に泣いた。したがって歌で「琴の音にひきとめらるる」と言ったのは、通り過ぎがたい気持の上に、五節の君も「琴の音」にそのような思いを引き起こされたからである。五節の君が「琴の音にひきとめらる」としたのに対して、源氏は「うち過ぎましや須磨の浦波」と言っている。このことから「琴の音」と「須磨の浦波」とが対応していると見られる。源氏にとって「須磨の浦波」は、この土地の秋を「またなくあはれなるもの」と感じさせるものであり、源氏の須磨における侘しい暮らしを代表するものである。したがって「琴の音」と「須磨の浦波」とは密接な関係を持つてくる。或いは先の源氏の歌の「泣く音(琴の音)」と「浦波」との関係を前提にしていると見ることができよう。

明石の巻に、源氏が明石に移って後、四月になって、淡路島を前にしながら琴を弾く場面がある。

京よりも、うちしきりたる御とぶらひども、たゆみなく多かり。のどやかなる夕月夜に、海の上曇りなく見えわたれるも、住み馴れたまひし古里の池水に思ひまがへられたまふに、言はむ方なく恋しきこと、いづ方

となく行く方なき心地したまひて、ただ目の前に見や
らるるは淡路島なりけり。「あはとはるかに」などの
たまひて、

あはと見る淡路の島のあはれさへ残るくまなく澄
める夜の月

久しう手ふれたまはぬ琴を袋より取り出でたまひて、
はかなく掻き鳴らしたまへる御さまを、見たてまつる
人もやすからずあはれに悲しう思ひあへり。広陵とい
ふ手あるかぎり弾き澄ましたまへるに、かの岡辺の
家も、松の響き波の音にあひて、心ばせある若人は身
にしみて思ふべかめり。

(二二九、四〇)

ここでは源氏の弾く琴の音が、明石の君の住む岡辺の家に
おいて松の響きや波の音に合っている。それを聴く心得の
ある若い女房は身にしみるほど心を動かされている。それ
は源氏が、海上を曇りなく見渡されることから古里の池水
と錯覚し、言いようもなく恋しく思われ、どことはなく行
方の知れない気持で琴を弾いたからである。

前の須磨で琴を弾く場面が秋であるのに対して、ここは
四月である。また前者が夜が更け「四方の嵐」を聞いている
が、ここは「のどやかなる夕月夜」である。さらに前者
が須磨の秋を「またなくあはれなるもの」と感じているの

に対して、後者は「淡路の鳥のあはれ」を残るところなく
味わっている。この時の源氏の琴の音は、若い女房を感じ
入らせただけでなく、明石の君も「世になきもの」と聞き伝
へし御琴の音をも風につけて聞き「(二五四)」と、評判どお
りのものと聞いていることが、後から分かる。このことは、
源氏が単なる外来者ではなくその土地に住み、抛り所にな
い心細い心持を味わい尽くしていることを示すものである。
それは明石の君と結ばれるための重要な布石でもあると考
えられる。ただここは琴の音が「松の響き波の音」に合う
のであるが、源氏の歌の場合は、「浦波」の方が「泣く音
(琴の音)」に紛うのである。

先と同じ場面で、明石の入道が娘の明石の君の琵琶につ
いて源氏に語る中に、次のようにある。

荒き浪の声にまじるは、悲しくも思ふたまへられなが
ら、かき集むるもの嘆かしさ、紛るるをりをりもはべ
り。

(二四三)

ここでは娘の琵琶の音が波の声に交じることを悲しみなが
らも、その音を聞くことを源氏に奨める気持もある。後に
源氏もそれを受けて、「明石には、例の、秋は浜風の異なる
に、独り寝もまめやかにものわびしうて、入道にもをりを
り語らはせたまふ」(二五三)と、秋の浜風がことさら身に

しみる頃、娘のことで入道と語らう場面であつたように言つてゐる。

君は、「このごろの波の音にかの物の音を聞かばや。さらずはかひなくこそ」など常はのたまふ。(二五四)

『宇津保物語』楼上・下でも琴の音が波の音等に合う例がある。犬宮が一年にわたつて琴を習練する場面を見ておきたい。

月のいと明らかに、空澄みわたりて静かなるに、山の木陰、水の波、やうやう風涼しくうち吹き立てたるに、いとおとなおとなしう弾き合はせたまへるを、大將、尚侍のおとども、折も心細くなりゆくに、(注19)涙落ちて、こと心教へたてまつりたまふ。(3・五二三)

晩秋の頃、月が明るく、空が澄み渡つて静かな夜、犬宮は、築山の木陰や池の波を次第に涼しく吹き立てる風の音に琴の音を弾き合わせている。仲忠も俊蔭女も心細くなつていく時期なのでその琴の音に落涙する。

かく心得たまふまに、いとかしこく、いささか苦しと思したらで、よろづの折々に著う、曲の物弾きたまふさま、いと愛し。前栽も山の木どもも紅葉ち、黄櫨の紅葉、今色づく。さまざまに面白く、風やうやう荒々し。山の中より落つる滝も、静かなる所にて聞き

たまへば、よろづものの音に合ひてあはれなり。

いぬ宮も、楓の琴の上に散り覆ひたるを、

まろが弾くうらやましとや琴の上に楓も

とばかり、「恥づかしと思ふ」とのたまひて、末ものたまはぬを、尚侍の殿、「いかにか。なほのたまはせよ、のたまはせよ」とて、「かかる音を弾かむ」とのたまはず。この浜つ風の荒き音に、いとかしこく合はせて

弾きたまへるを、大將愛しう聞きおはず。(五二五・六)

犬宮は様々な折に大曲を引いているが、風が次第に荒くなつてきて築山の中から落ちる滝の音も、静かなところで聴くとすべて自然の音が琴の音に合つて心をうつ。「ものの音」を「自然の音」と取られているが、(注20)犬宮の歌に、犬宮が琴を弾くのを羨ましいと思つて、楓もこのような音を弾こうとするのかということをやつているので、滝の音など全てが琴の音に合うと言つていると考えられる。犬宮は賀茂川の岸に吹く風の荒い音にも上手に合せて弾くことができる。

このように犬宮は「よろづの折々に」琴を弾いているが、その琴の音に合わせられるのは木陰・波の風に吹かれる音である。また次第に荒くなる風の音、それに滝の音もすべて琴の音に合う。その一方で河原風の荒い音に合わせて弾

くことができる。言わば自然の方からも、弾き手の方からも互いに琴の音によつて通い合うことができるのである。そのようなことができるのは、取りも直さず技量の上達を物語っている。

このような琴の習練の仕方は、楼の上・上にも犬宮の琴を始める前に、仲忠が妻の女一の宮に述べた次のような考えに基づいている。

春は、霞、ほのかなる鶯の声、花の匂ひを思ひやり、夏の初め、深き夜の時鳥の声、暁の空の気色、林の中を思ひやり、秋の時雨、夜明らかなる月、思ひ思ひの虫の声、風の音、色々の紅葉の枝を別るる折の気色を思ひ、冬の空、定めなき雲、鳥、獣の気色の、朝の雪の庭を眺め、高き山の頂を思ひやり、凍みたる池の下の水をあはれび、深き心、高き思ひも、もろもろのことを思ひ合はせ、世の中のすべて、千種にありと見ゆる物の、覚ゆる物、また時に従ひつつ、色衰へ、久しくなり、またむなしくなりぬるものを心に思ひ続けて、琴の音に弾き添へむと、思ひ同じくして弾きはればこそ、琴の音、思ひ思ひに従ひて響き、よろづの折には合ひはべれ。遊ばすやうに、ただ弾きにやは弾くものならむ。

(四四六)

四季の自然だけでなく森羅万象に思いを馳せて琴の音に弾き加えようと、思いを同じくして弾けばこそ琴の音が自在に響き、全ての折に合うのだと言っている。これは基本的には対象の深い味わいを琴の音に弾き加えようとするものである。源氏が望郷の念を募らせながら、須磨の秋の「あはれ」や「淡路の鳥のあはれ」を味わい尽くして琴を弾くことによつて、その音色が「いとすごう」聞こえたり、聴く者を「身にしみて」感じさせるのであろう。この中の「高き山の頂を思ひやり、凍みたる池の下の水をあはれび」は、先の山水の故事を踏まえていると考えられる。

このような水の流れと琴の音との繋がりは歌や漢詩に見られる。

葦引きの山水はゆきかよひ琴の音にさへながるべら
なり

〔後撰集〕卷四・夏 貫之

これも「山水」の故事によると言われている。^(注2) 伯牙が流水を思つて弾くと鍾子期は湯々たる流水を思い浮べたことをふまえて、山水が琴の音に通じ合つて流れる、即ち山水に比せられる自分も琴の音に泣けてくるというのである。谷の水琴の音絶えず聞こゆれば時のまをだにへだてずぞ見る^(注22) 〔千里集〕遊覧部 潤水弹琴不暇聴

これも「山水」の故事によつて、琴の音と谷の水とを同列

のものとしている。

次に漢詩における琴の音の形容を見ておきたい。「流水」及び「知音」(山水)の故事をふまえた詩については新聞一美氏に指摘がある。^(注23)ここでは「流波」、「咽」(むせび泣く)等と形容されている詩を挙げる。

伯牙手を揮ひ、鍾期声を聴く。(中略) 状は崇山の若く、又流波に象る。(伯牙揮手 鍾期聽声 (中略) 状

若崇山 又象流波 『文選』^(注24)「琴賦」

ここでは、伯牙・鍾子期の故事によって、琴の音が「崇山」とともに「流波」に形容されている。

閒関たる鶯語 花底に滑らかに、幽咽する泉流水下

に難めり。氷泉は冷洪して絃は凝絶し、凝絶して通

ぜず 声暫らく歇む。(閒関鶯語花底滑 幽咽泉流水

下難 氷泉冷洪絃凝絶 凝絶不通声暫歇 『白氏文

集』^(注25)「琵琶行」

「琵琶行」は、琵琶の音を「幽咽する泉流」(かすかに咽

び泣くような泉の音)と形容している。これは源氏の歌の

「恋ひわびて泣く音にまがふ浦波」と通うものがある。

見説く秋堂の事 金吾玉琴を撫づ 古人看るに象

あり 新調聴くに淫ることなし 峽断えて玉泉

咽び 鳥寒くして五夜深し 君が相感ずる句を吟

ずれば 旧の知音に遇へらむが如し

(見説秋堂事 金吾撫玉琴 古人看有象 新調聴無淫

峽断玉泉咽 鳥寒五夜深 吟君相感句 如遇旧知音

「奉和 執金吾相公彈琴之什」^(注26)「菅家文章」卷一)

この詩は、「琵琶行」から得た発想と言われるが、琴が「玉泉咽び」と形容されている。

三、「浦波」と「松風」

先のような例からも、「泣く音にまがふ浦波」を、「泣く音」(琴の音)に「浦波」が紛う意と取ることができる。

それは同じく琴に通う「松風」とどのような関係にあるのだろうか。

明石の入道は、娘の箏の琴を、「山伏のひが耳に松風を聞きわたしはべるにやあらん」(二四二)と、松風の音を聞いて琴の音に通わせることができる源氏に語っている。逆に琴に松風が響き合う例としては、松風の巻に、明石の君が大堰の邸で琴を弾く場面がある。この邸は、「家のさまざまおもしろうて、年ごろ経つる海づらにおぼえたれば、所かへたる心地もせず」とあるように、明石の浦にいるような感じのする所である。季節も秋である。

渡りたまはむことは、とかう思したばかりほどに日ご

る経ぬ。なかなかもの思ひつづけられて、棄てし家居も恋しうつれづれなれば、かの御形見の琴を掻き鳴らす。をりのいみじう忍びがたければ、人離れたる方にうちとけてすこし弾くに、松風はしたなく響きあひたり。尼君もの悲しげにて寄り臥したまへるに、起きあがりて、

身をかへてひとりかへれる山里に聞きしに似たる
松風ぞ吹く

御方、

ふる里に見し世の友を恋ひわびてさへづることを
誰かわくらん (四〇七―八)

尼君の歌の「松風」は、松風の音とともに明石の君の弾く琴の音の意がある。これは、「松風はしたなく響きあひたり」とあり、また「松風入夜琴」^(注26)の題で詠まれた、「琴の音に峯の松風かよふらしいづれのをよりしらべそめけん」^(注29)（『拾遺集』卷八・雑上 齋宮女御）によると言われているからである。尤も「琴の音にひびきかよへる松風はしらべても鳴く蟬の声かな」^(注30)（『寛平御時后宮歌合』七五右）の歌が既にある。ただ尼君の歌は、「かよふ」ではなく、「響きあひ」とあり、琴の音を「松風」と表現している。既に『宇津保物語』春日詣に「みな人も衣脱ぎかけ松風の響き知

りたる人やあるとぞ」^(一二七二)のように、松風に響く琴の音を「松風の響き」と表現している。ここで琴の音に松風が響き合うことに基づいて、「松風」と表現したのは、松風しか答える者のいない大堰の邸の日々が明石の暮らしを懐かしく思い起こさせるからであろう。

明石の君の「恋ひわびてさへづること」の「こと」には言と琴とが掛けてある。これは源氏の歌で、「恋ひわびて泣く音」に泣く音と琴の音がかけてあることに通じるものがある。また「恋ひわびて」は、明石の君が昔の友恋しさには堪えかねるのであり、源氏の場合は都の人恋しさに堪えかねるのである。しかもこの場面では松風が琴の音に響き合っている。源氏の歌においても、泣く音（琴の音）に浦波が紛うのである。その浦波自体も「思ふ方」があつてそこから風が吹くので泣く音（琴の音）に紛うのであろうと言うのである。いずれも「松風」や「浦波」の外には訪れる者のない身の上であることを物語っている。

『後撰集』には次の二首が並べられている。

みじか夜のふけゆくままに高砂の峰の松風吹くかとぞ
聞く（『後撰集』卷四・夏 夏の夜、深養父が琴弾くを
聞きて 藤原兼輔朝臣）

葦引きの山下水はゆきかよひ琴の音にさへながるべら

なり（同じ心を 貫之）

これは同じ琴の音を詠んだものであるが、兼輔の歌は「高砂の峰の松風」が吹くのに形容し、貫之の歌は「山下水」に通じ合うとしたものである。前者は「李嶠百二十詠」「風」等に、後者は伯牙・鍾子期の「山水」の故事によると言われる。^(注31)この二首は「峰の松風」と「山下水」というように対照的に配列されている。

第一第二絃索々、秋風松を払って疎韻落つ。第三第四絃冷々、夜鶴子を憶うて籠中に鳴く。第五絃声最も掩抑、隴水凍り咽んで流れ得ず。（第一第二絃索々 秋風払松疎韻落 第三第四絃冷々 夜鶴憶子籠中鳴 第五絃声最掩抑 隴水凍咽流不得 『白氏文集』卷三）^(注32)「五絃彈 悪鄭之奪雅也」『和漢朗詠集』卷下 管絃

「五絃彈」は、五絃の琴を、「秋風松を払って疎韻落つ」、「隴水凍り咽んで流れ得ず」と形容している。

菅原道真にも次のような詩がある。

栄啓が後身吏部王 七条の糸の上に百の愁へを忘る
酒酣にして奏することな蕭々の曲 峽水松風惣べて
腸を断つ（栄啓後身吏部王 七条糸上百愁忘 酒酣莫奏蕭々曲 峽水松風惣断腸 『菅家後集』「感 吏部王 弾レ琴、応レ制」一絶）^(注33)

『菅家後集』では「峽水松風惣べて腸を断つ」と、「峽水」と「松風」を並べている。

先の明石の君が弾いたのは「かの御形見の琴」であるので、源氏の「恋ひわびて泣く音にまがふ浦波」と明石の君の「恋ひわびてさへづる言（琴）」が「山水」の故事やそれに基づく先行の漢詩や和歌をふまえて対照的に描かれたと考えられる。源氏は春宮への別れの文に、「いつかまた春のみやこの花を見ん時うしなへる山がつにして」（二八二）と、自らを「山がつ」と言っている。また須磨へ持参する物についても、「あやしの山がつめきてもてなしたまふ」とあつた。明石の君の方も母君が娘のことを「まさにかくあやしき山がつを心とどめたまひてむや」（二二〇）と言っている。源氏と明石の君は琴を通じて契りを持つことになるが、それは単に琴が契機になったということだけではない。身分差の大きい二人が契りを持つには、琴の音に「浦波」が紛い、「松風」が響き合うように、その土地で暮らす悲哀を味わい尽くす必要があつたのである。

注1 中田武司編『源氏物語古注集成12 岷江入楚第一卷』

六五頁

注2 『源氏物語』本文の引用は、新編日本古典文学全集源氏物語により冊数・頁数を示す。以下同じ。但し表記は私

に改めたところがある。

注3 井爪康之編『源氏物語古注集成9 一葉抄』一三六頁

注4 「われは都を思う。都にもわれを思う人はいくたりかいるであろう。その両地の感応が、風には、波になつたかと思ふ。——源氏はひとり都を思う。都のわれを思う人を思う。」(九八頁)

注5 玉上琢彌編『紫明抄河海抄』三二四頁

注6 『新編国歌大観第三卷私家集編1』による。以下私家集の引用は同書。但し表記は私に改めたところがある。

注7 伊井春樹編『源氏物語古注集成7 内閣文庫本細流抄』一一二頁

注8 『新編国歌大観第一卷勅撰集編』による。以下勅撰集の引用は同書。但し表記は私に改めたところがある。

注9 中野幸一編『源氏物語古註釈叢刊第七卷 岷江入楚』四七頁

注10 伊井春樹編『源氏物語古注集成25 萬水一露第二卷』三八頁

注11 注7に同じ。一一二頁

注12 清水婦久子著『源氏物語の風景と和歌』一〇三頁 一九九七年 和泉書院 またこの一段は、次の、源氏が「枕をそばだてて、枕うくばかりになりけり」の「要因としての風景」とある。

注13 「逸者其吟楽怨者其吟悲」(伊井春樹編『源氏物語古注集成25 萬水一露第二卷』三八頁)。

注14 井爪康之編『源氏物語古注集成22 休閒抄』一七二頁

注15 加藤静子「須磨の巻の「琴」の琴から松風へ」物語生成の一断面——(相模国文第十八号 一九九一年三月)に、この場面について「琴」の琴が「四方の嵐」の風と「浦波」の波の音と響きあつて、身にしみるほどの寂寥感をおぼえるという何気ない文章も、注意しておきたい」とある。

注16 丸山キヨ子著『源氏物語と白氏文集』第三章 源氏物語すまの巻に与へた白氏文集の影響(東京女子大学学会研究叢書3 一九六四年八月)、中西進著『源氏物語と白楽天』「九 須磨」(一九九七年七月 岩波書店)等に指摘がある。

注17 「心変りはしないというお言葉(調べの変らぬ琴)をたよりに、松風の音を聞きながら泣き声を上げて(琴を弾いて)いた。」(新大系二・二〇三)と解釈されている。

注18 次の例は虫の鳴き声であるが、虫の音と琴の音を区別のないものと見ている。

月影のさやけさほどに鳴く虫は琴の音にこそたがはざりけれ(斎宮女御集) 宮

注19 『宇津保物語』本文の引用は、新編日本古典文学全集うつほ物語により、冊数と頁数を示す。以下同じ。

注20 新全集の頭注。大系には、「前栽も山の木ども」以下の一文についてと思われるが、「以下秋冬の自然の風景と琴の音の叙述」とある。三・四五九頁頭注

注21 片桐洋一校注『新日本古典文学大系 後撰和歌集』五
四頁脚注

注22 「谷水の琴の音たえず聞こゆれば時のまをだにへだてず
ぞ聞く」（『赤人集』）という同様の歌がある。

注23 「松風」と「琴」——新撰万葉集から源氏物語へ——（片
桐洋一編『王朝文学の本質と変容 散文編』所収。二〇
〇一年十一月 和泉書院）

注24 新釈漢文大系（高橋忠彦著『文選（賦篇）下』三二〇、
一一頁）

注25 高木正一注『新修中国詩人選集4 白居易』三二二頁

注26 川口久雄校注『日本古典文学大系 菅家文章菅家後
集』一一二、一三頁

注27 注26の書六四二頁補注

注28 『李嶠百二十詠』の「風」の詩による。ただし「松声」と
ある。

注29 他に『拾遺抄』卷十・雑下 三句「かよふなり」五句

「しらべそむらん」、『斎宮女御集』三句「かよふなり」、
『和漢朗詠集』卷下・管絃 三句「かよふなり」

注30 新編国歌大観第五卷歌合編歌学書・物語・日記等収録
編

注31 注21に同じ、

注32 佐久節註解『白樂天全詩集第一卷』二八八、九頁

注33 注26に同じ。四七五頁